

「イヤ然うでおますやろうが、實は昨晚宿屋で飲んだ酒が頭へ上つて氣持ちが悪いので、見れば御當家は立派な酒屋さんで居酒はなざるまいが、一合がお邪魔なら五合だけ賣つて貰へまへんか」

「甚いお氣の毒さまでござりますがお斷りを申します」

「そんなら、五合が賣れんのなら一升でも二升でも構わん、二升買ひます、量つて下され」

「ヘイ只今申しました通り、私の方は酒造元でござりまして小賣は一向致しまへん、ハイ一樽か又は一駄とか一ト車なら買ふて戴きますけども、一升や二升の端下酒は誰方様でもお斷り申して居りますのんで」

「イヤ、何やと言ふね、一升や二升の端下酒はお斷り申して居る、一樽か一駄か、イヤ一ト車、オイ馬鹿にするなへ、宿屋で飲んだ酒が頭へきて心持が悪い依つてに飲み直して五合は氣の毒やで、一升か二升賣つて呉れと頼んで居るのに、小賣はせん、コラ、小賣をせぬ

大倉の月桂冠、其の外何程でも酒造屋は數知れん程あるのぢや、ど間抜け奴が、何を吐してけつかるねん、一駄二駄でなければ賣らぬやなんて、洒落た事を吐すなエ、スツトコドツコイのカンカンツク、搦木奴が、オイ喜い公、汝も言ふたれ、」

「言ふたる、コラ何う見違へやがつたんぢや、スツトコドツコイ奴が、ガリ／＼亡者奴が、エ、ツ搦木奴が、アノお味嚙する搦木奴が」

「そないに丁寧と言ふない、ド運附奴が、こんなん喰ふて置きやアがれ、ブウツ……サウ行かう」

二人は悪口吐いて戶外へ出ますと

「藤助、宗兵衛」

「ヘエ、コレは旦那さんですか」

「今、次の間で委細の事は皆聞いて居たが、終ひにド運附と吐した、何うも聞捨てにして置くと言ふ譯にいかん、汝行て呼んで來い、コレ荒い言葉をだすな、穩か

のは元より解つてあるわい、然うや依つてに頼んで居るのぢやないか、俺等兩人は旅をして居る者ぢや、向方先を見て物を言へ、汝は何ぢや」

「私は此家の若い者ぢや」

「然うぢやろう、若い者面がしているわ、豈や旦那ぢやあるまい、コラ旅をするのに一駄の二駄のと酒を買うて、そんな物を提げて歩けるかへ、コラ耳を浚へて能う聞きやがれ、ひよつとこ野郎が、俺等は大阪者ぢや何う見違へやがつた、一駄二駄と言ふて買う位いなら大阪へ歸んで立派な酒を買うわい。こんな田舎酒を買はぬかて、コラ耳の掃除をして聞いて置け、大阪の平野町二丁目には米喜の澤の鶴、灘の御影に嘉納の菊正宗、同く嘉納の白鶴、酒の司長部の大關、山邑の櫻正宗、花木の富久娘、小網の世界長、若林の忠勇、泉正宗、鈴木の山星、高田の金盃、尙だ有るぞ、堺では大塚の金露、同く大塚の菊泉、肥塚の都菊、又伏見では

に言ふて呼んで來い、又逃げたりしたら面道やよつてに、モンお歸りやす、主人が只今申されますにわ貴郎方お兩人にお酒をば、五合でも一升でもお賣り致しますと言ふて居られます依つてに、何卒お歸りなすつて下さりませと、呼んで來い」

「ヘエ畏まりました」

「コレかならず荒い言葉を出すなよ」

「ヘエ」

「然うして戻つて來たら、ド運附の因縁に依つて一向構わんさかい、よいか皆薪木で打擲てやれ」

「承知いたしました」

と若い者は戶外へ馳け出しますと、兩人はモウ家なら十四五軒も先へ行て居ります。

「モン大阪の衆お二人さん、チョツとお歸りなさつて」

「ナニ、一寸歸れ、何ぞ用か」

「ヘエ、主人が左様に申されます、假へ一升でも二升で